

# マンガ読解におけるコミュニティ内で共有されたリテラシー（1）

——マンガ読者は「何を」「どのように」読み取っているのか？——

○立教大学 池上 賢  
立教大学 足立加勇

## 1 目的

日本において、マンガは絵を用いた一見して分かりやすいメディアであり、それを理由として広く普及したとされる。しかし、先行研究によれば、マンガは「読めばすぐわかるもの」ではないことが指摘されている。たとえば、是永（2017）はマンガ読解において「日常的な行為における規範の参照」があるとしている。また、拙稿（池上 2013）では人々はマンガを読むという行為において、登場人物、場面、ジャンルなどを同定しテキストを解釈する時に、さまざまな知識を参照していることを示した。以上を踏まえ、本発表では、社会学がマンガの読解過程について分析を行う際に、どのような知識に焦点化すべきか検討した。

## 2 方法

本報告では、先述した拙稿（2013）における、2009年7月から11月にかけて行われた実験調査のデータに対して再分析を行った。調査概要は以下の通りである。実験では、1コママンガ、4コママンガ、ストーリーマンガからなる44種類のマンガのテキストを用いた。ただし、ストーリーマンガについては、実験の時間的制限などを考慮して特定の場面を4ページにわたって抽出した。

実際の調査では、知人同士、あるいは家族同士である6組のペアを対象に、上記のテキストを提示し、その内容について自由に話し合ってもらった。その際は会話を録音したほか、テーブルの上で協力者に注目している箇所を指さしてもらったうえで、その場面を固定カメラにより撮影し、テキストのどのように注目しているのか把握した。

## 3 分析

実験の結果、注目すべき知見として、マンガ作品の解釈において、マンガに関する社会的文脈の中で、読者である人々によって共有されたマンガ表現に関する知識が、重要な役割を果たしていることが明らかになった。たとえば、実験の協力者は、登場人物の物語上の役割を判別する上で、目や鼻などの描き方に注目し、その人物が主人公であるのか脇役であるのか、あるいはどの国の出身者であるのかを判断していた。つまり、マンガ表現に特有の目の描き方などのマンガ読者に共有された知識が読解のための手掛かりになっていることが示唆された。

## 4 結論

以上から、マンガ読解においては、読者は社会的文脈の中で読者によって共有されている知識を用いて、マンガを読んでいることが示された。したがって、マンガをめぐるしばしば起こる議論について記述するためには、さまざまな読者が用いている知識がどのようなものであるのか、を把握する必要があるといえる。

## 文献

池上賢, 2013, 「マンガを読むという経験——マンガテキストの解釈手続きに見る理解の達成」『マンガジャンル・スタディーズ』臨川書店。

是永論, 2017, 『見ること・聞くことのデザイン——メディア理解の相互行為分析』新曜社。